

## [コメント]

著者	徐 蘇斌
雑誌名	東アジアの都市形態と文明史
巻	21
ページ	212
発行年	2004-01-30
その他のタイトル	Comment
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00002897">http://doi.org/10.15055/00002897</a>

閑視されていた郊外の問題について、内陸都市成都における「郊外」(suburb)の問題を取り上げ、都市と農村との境界域に見られる近代特有の動きに着目している。

近代化の成立過程についてみると、西洋では工業化に、中国では商業化にその際立った特徴を見出すことができる。中国内陸部の都市では、旧来の城門付近に自然発生的に市場が形成され、物品の交換が盛んに行われていた。清末以後、民族工商業の促進政策により、道路が整備されるようになると、商業面ではさらに大きな発展を遂げた。東大街・北大街・水井街などの城門周辺はその典型で、都市や農村とは異なる特徴を有するエリアである。こうした状況は、ヨーロッパ都市とは異なり、中国国内でも開港都市とは趣を異にするもので、古い都市基盤の上に成立した内陸近代都市の特徴と言えるものであろう。

さらに、城壁周辺の住民構成を見ると、すべて貧民階層であったことが知られるが、旧来、中国の「正史」では、城下町や貧民の問題は看過されてきた事柄であった。それに対して、STAPLETON氏は、「郊外」という都市と農村との境界域の役割を解明するとともに、内陸都市における商業化・市民化の動きに着目し、近代化の特徴を捉えようとしている。その意味で、この研究は中国都市史研究に、新しい視点を与えたと言えよう。

また、都市の拡張は近代化のメルクマールと言えるが、そこでは、城壁を突破することにより、伝統的都市空間を超える近代化のプロセスが内包されており、氏の「Outside the Gates」の問題設定はこの問題を深く解明するに際しても、重要なヒントを与えるものと思われる。

(東京造形大学)